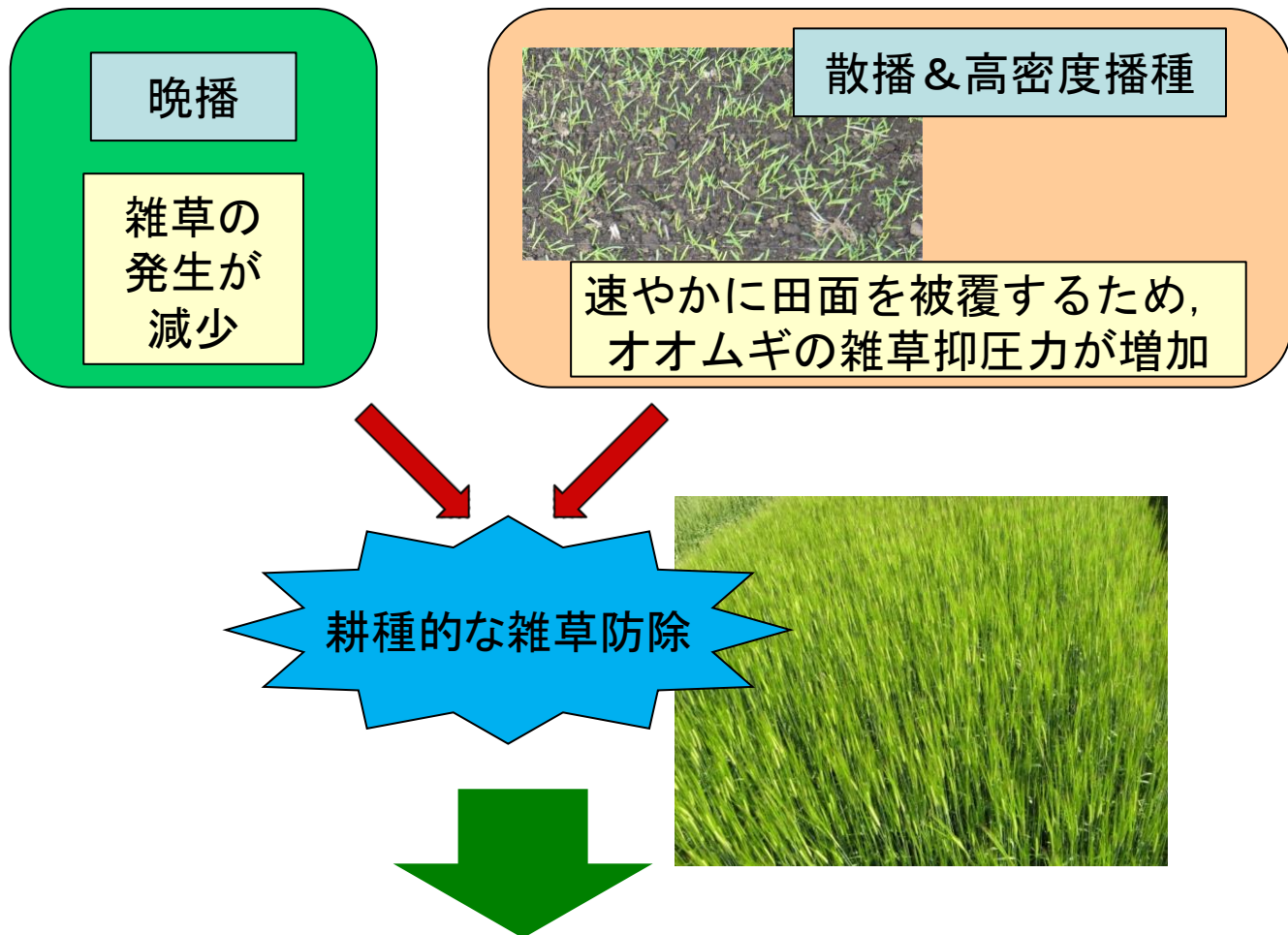


暖地の飼料用オオムギ栽培における 耕種的な雑草防除法

目的と特徴

- 現在、農薬の使用を避けることとなっている発酵粗飼料用として利用するオオムギ栽培において耕種的な雑草防除法の開発に取り組みました。
- 晩播、散播、高密度播種を組み合わせることで、除草剤を使用しない管理でも実用上問題とされない程度まで雑草の生育を抑制することができます。
- 赤かび病が常発する暖地では、赤かび病由来の有毒物質デオキシニバレノールが蓄積する前（出穂約3週間後）に収穫する必要があります。出穂約3週間後頃の収穫では、散播および高密度播種を導入しても倒伏の危険性はほとんどありません。



飼料用オオムギの地上部乾物収量 1.2kg/m²以上^{※1}
収穫時の雑草の乾物重はオオムギの乾物収量の1%以下^{※2}

※1 品種は「ニシノチカラ」を使用。

※2 収穫物に混入しても飼料品質に全く影響を与えない水準。

成果

- 播種時期は12月上中旬、播種量は苗立ち本数で200本/m²を目標とします。
- 目標苗立ち本数を達成するためには、現状では播種量20kg/10a程度が必要です。表層散播方式などの導入による苗立ち率の向上で播種量を少なくすることが可能と考えられます。

本耕種的防除法による栽培方法

播種時期: 12月上中旬
播種様式: 散播
播種量: 14~20kg/10a(目標苗立ち本数: 200本/m²)
収穫時期: 出穂約2~3週間後
農薬: 使用しない
上記以外の栽培管理は地域の慣行に準じる

本耕種的防除法による効果

晩播の効果 (本/m²)

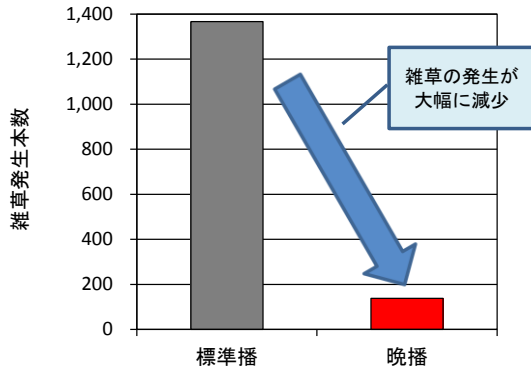


図1 飼料用オオムギの播種時期が雑草の発生に及ぼす影響

晩播は12月中旬、標準播は11月下旬に播種した。

散播および高密度播種の効果

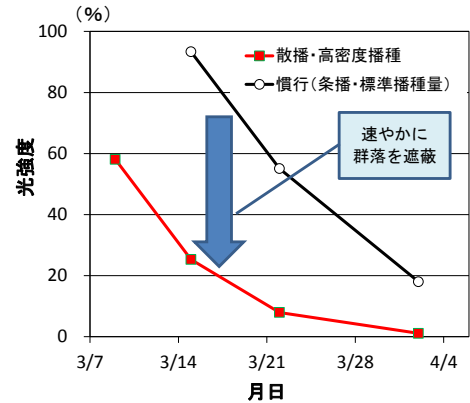


図2 散播・高密度播種が飼料用オオムギ群落内の光強度に及ぼす影響

光強度は群落外との相対値で示す。

本耕種的防除法による栽培事例

本事例の耕種概要

播種時期: 12月19日
播種様式: 散播
播種量: 20kg/10a
収穫時期: 出穂約3週間後
除草剤: 無処理

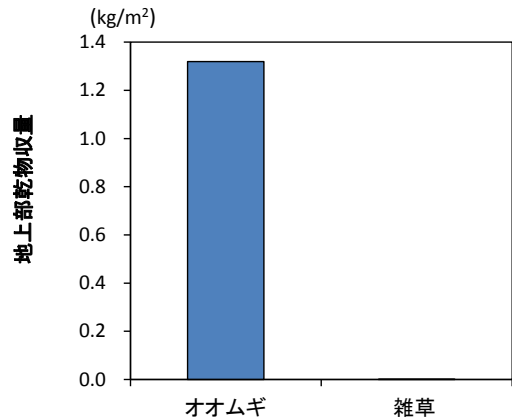


図3 本防除法による飼料用オオムギの地上部乾物収量と収穫時の雑草の乾物重

対象作物、普及対象

- ・ 飼料用オオムギ、九州

対象農家

- ・ 麦作を水田輪作に取り入れている経営、水田作において飼料生産を導入したい経営

必要な道具

- ・ 一般的な畑作用機械

関連HP (マニュアル)

その他

- ・ 出穂3週間後までに収穫することが前提の技術であり、赤かび病が常発する地域において導入する。